天地　ネットワークテーブル　553号
天地シニアネットワーク　2024. 3. 18

TENTI TODAY			1
会員の広場　新聞より「株価５万円台へ経営者は「夢」語れ」			2
随　筆	「日々をいとおしみて」 終戦の頃を思う	宮川典子	3
歴　史	「島津斉彬の人物像と功績」 その１	臺　一朗	4
歴　史	「了解日本（日本を知る）」（２０） 日本人の宗教観、神道（宗教）、天皇制 （３）	兪彭年	6
歴　史	前号「明治時代、新生日本を新しい乗り物、自動車が後押し」 のつづき	津田孚人	9
事務局			12

****

ＴＥＮＴＩ　ＴＯＤＡＹ

****

本格的な春到来で、朝起きるのがだいぶ楽になりました。とはいえ、朝晩の気温の寒暖差の激しさ、やはり気になります。インフルエンザ、花粉症、はしか、と外出には注意警告が幾つも出ています。マスク着用と、帰宅時の手洗いは欠かせないようです。病院通いに、お彼岸のお墓参り、春も結構忙しいです。

****

突然の訃報に愕然としています

先月（２月）まで、「仏独の和解と欧州連合（EU）の発展・繁栄について」を掲載していましたが、寄稿者の佐川雄一さんが２月に急死しました。弔問に参上しましたが、１１月に区の検診を受け、数日後に、即、大病院で再検査をとの連絡があり、関東中央病院で検査を受けたところ「胆のうがんの末期症状」で治療は無理との診断だったとのこと。一応、抗がん剤、放射線などの治療をしたが、体力の衰弱が激しく、入院することなく家で最期を迎えたとのことでした。検診前は、少しだるいという程度だったそうで、奥様も、未だ信じられないというご様子でした。当方も１２月に電話で話をしたところなので、ビックリ仰天しています。

佐川さんは、高校時代の級友、大学卒業後旧安宅産業に入社、ブラジルに7年駐在、その間に、安宅倒産で伊藤忠商事に移り、最後はインド代表の任にありました。性格は真面目で温厚、正統派で分析、報告能力は抜群、官庁などの勉強会にも講師として呼ばれていたようです。

当ネットでは、寄稿者として早くから多大の支援をしてくれました。昨年１１月から、クラス仲間３人目の死、寂しさが急激に増してきました。

****

大相撲、星のつぶし合いが激しくなり面白くなってきました。その中で最近、インタビューを受ける力士の受け答えが良くなっているのに驚いています。他の競技でも、同様の傾向が見られるので、大リーグ、大谷翔平選手の影響があるのではと感じてい

ます。大谷選手のインタビューでの受け答えは、説明がはっきりしていて十分、申し分なしです。良きお手本となって、他のスポーツ選手の模範となっているようです
****
その故か、政治家の方達のインタビューでの応答の悪さが際立っています。本来、政治家は雄弁なはず、何も語らず鸚鵡返しの説明しかしない政治家は、失格です。国政の中心にあって政治を担っているのがそのような政治家グループ、先行きは、恐ろしい限りです。
****
株価５万円台へ経営者は「夢」語れ
日経新聞朝刊・３月８日・のオピニオン欄に、大変興味をひく文章がありました。マネックスグループ・グローバル・アンバサダーのイェスパー・コールさんという方が書いた文章ですが、その中の１９８９年、英投資銀行ＳＧウォーバーク東京にいた時に、「債券は紳士のため、株式は夢想家のためにある。株は強い夢がなければアウトパフォームできない」と恩師から言われたという箇所、どこか恩師は日本人ではないかと思わせるところがあるのです。
イェスパー・コールさん、「私は紳士でありたいと思いながら、日本の将来に関しては、夢を見ることを恐れない」と言い、「日経平均は２０２５年末までに５万５０００円まで上昇すると予想」そして同時に「株価上昇は、日銀による金融緩和や、日本政府の新しい資本主義が理由ではない。お上によるマクロ刺激策が株価を支える時代は終わった。今、日本の強さを支えているのは民間部門によるボトムアップだ。過去２０年にわたる絶え間ないカイゼンとリストラがニッポン株式会社を価値創造の大国に変えた」「もし日本のＣＥＯ（最高経営責任者）が、米テスラのイーロン・マスク氏らのように、将来の改革と成長に向けた戦略をアグレッシブに語り始めたら、米国のような「成長プレミアム」が日本でも実現することになる。日本のＣＥＯが紳士的でありたいと願うのは理解できるが、国内外の投資家は刺激をまっている」と語っている。
　最高値を更新した東証日経平均株価について、メデイアも、そしてメディァに登場する専門家も、日銀の金利操作、円相場、企業業績など目先の要因で株価の見通しを語っている。しかし株価は別物、株は夢を見ること、というイェスパー・コールさんの説に賛成です。
　現在の株高の最大の因は、地政学的な要因での日本への期待＝夢が高まり（一時的かもしれませんが）、これまでにない大量の海外資金が日本に流入している、にあると言えそうです。日本の（各界）ＣＥＯが、将来の改革と成長に向けた戦略をアグレッシブに語り始めたら、イェスパー・コールさんのいうところの日本の株価５万円も、あり得るかもしれません。
　もう一つの「債券は紳士のため」も同感です。以前は、日本興業銀行、日本長期信用銀行などが発行する「金融債」が身近にあって債券への馴染みがありましたが、最近は債券が、遠い存在になってしまいました。
　債券は株と違い、元本は保証され、期間も利息も確定していますので、購入したら黙って持っていればよく、長期の資産としては一番でした。所有者は、紳士然としていて良く、アタフタすることはないのです。
****
（朝日新聞/文化欄）
　星の林に　ピーター・j・マクミランの詩歌翻游

　願はくは　花の下にて　春死なむ

そのきさらぎの　望月の頃
（『山家集』 西行）

It is my wish that I may die
around the same time
as the Buddha passed away
when the moon is full
and under a cherry tree in full bloom

****

会員の広場

****

エッセイ集　　宮川典子（９４歳）　「日々をいとおしみて」

「終戦の頃を思う」

８月と言えば、やはり７７年前の太平洋戦争終結時が話題になる。ＮＨＫで「関東大震災と東京下町大空襲」という一時間番組が放映された。１９４５年の空襲を体験した私は、当時１６歳、あの無念さを思うと見ずにはいられない。１９２３年の関東大震災のすさまじい跡が映し出される。復興時の東京市長は、新しい都市には幅の広い道路を多く造りたかった。しかし土地を所有する地主の反対でそれも減らされ、その上再建された家々はほとんどが前と同じ火災に弱い木造であった。

　その様子をじっと見ていたのが、震災２年前にアメリカから来たレーモンドであった。彼は来日後すぐ、師のライトと共に帝国ホテルを建てた。次々建てた東京女子大のチャペルも、前市長の後藤新平の個人宅も、石造り建物は、震災にはびくともしなかった。彼は、日本びいきでずっと日本に居住し、各地に石造りの建造物を作っていた。しかし、太平洋戦争が始まるとアメリカに帰国した。
　緒戦のハワイ沖では日本は大勝利を収めたものの、順次敗退し、サイパン島を取られた後は、日本国内に空襲が多くなった。
　レーモンドは既に軍に招集されていた。「日本を攻撃するなら爆弾ではなく焼夷弾を」というのが彼の主張である。焼夷弾なら火の手の上がった家から、次々近くの木造の家に燃え拡がるというのだ。彼はアメリカの原野に日本家屋を幾棟も建てて、どの焼夷弾が有効かを研究した。彼があえてそうしたのは、早く戦争を終わらせたいとの一心であったのだろう。
　やがて沖縄もアメリカ軍に取られ日本中ほとんどの市町村が焼け、日本はついに１９４５年８月終戦となる。このレーモンドの研究の一端を見ても、アメリカの英知が一段と勝っていたのではないか。

　さて、３月９日深夜の東京下町大空襲である。いつもより多数のＢ２９爆撃機が押し寄せ、上野駅近くの我が家から、東の空が真っ赤に燃えていた。人々は各自の家に掘られていた防空壕にひそんで時を送ったが、こちらまでは来ないかと一安心したところだった。

１機だけでやってきた敵機がたった１個だけ、上手（かみて）に焼夷弾を落としたのである。近くの家にひどい物音がして慌てて防空壕から出た。消防車などどこからも来ない。北風に煽られて我が家が燃えるのを家族８人、涙を流しながら眺めた。

現在は自分の思うことを口に出せるようになった。戦時下では戦いに不利なことを口外すれば大変なことになった。あれほどひどい空襲を受けながら、政府の上層部、陸軍海軍の指揮系統がどんなだったのだろうか。新しい世は自ら物を考え、実行に移すようにしていかなければと思う。

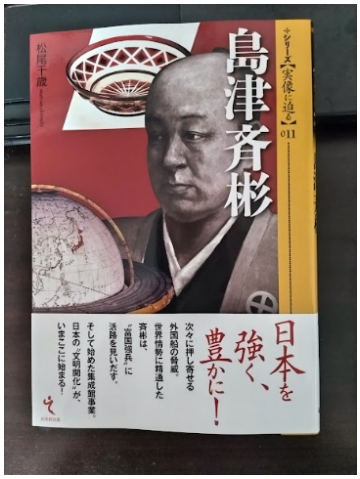
なお、レーモンドは戦後再び日本に来て、その地の文化を生かしながら方々に立派な建物を建て、数々の受賞を得た立派な人だった。

（２０２２年１０月）

****

「島津斉彬の人物像と功績」　その１　　臺　一郎　（７５歳）

松尾千歳著「島津斉彬」



薩摩藩江戸上屋敷跡

（背景は NEC 本社）

今回は、幕末期を代表する名君として知られる薩摩藩第 11 代藩主・島津斉彬について、その人物像や功績等の紹介と考察を行なってみる。

彼は幕末以前の薩摩藩において、下級藩士の中から西郷隆盛や大久保利通等の人材を抜擢し、維新時代の幕開けに向けて主導的リーダーとして育てた。また、明治政府や他藩に先んじて富国強兵と殖産興業を藩政や藩運営の基本方針として掲げ、軍備の近代化や多様な新産業の育成を実行した。

島津斉彬は江戸時代の文化６年３月（西暦 1809 年 4 月）薩摩藩の第 10 代藩主・島津斉興を父に、鳥取藩藩主の池田家より嫁いできた弥姫（周子）を母に、島津家の長男として薩摩藩江戸上屋敷（現在の港区三田）で生まれ、安政５年７月（西暦 1858 年 8 月）病により 49 歳の生涯を鹿児島で終えた。藩主としての在任期間は 7 年間と短く、幕末期を代表する名君でありながら、名前以外は現代人の記憶にさほど残っていない。

江戸時代の大名家では子供の教育は乳母にゆだねるのが一般的であったが、斉彬の母弥姫は三人の子供を全て自らの手で養育した。特に長男斉彬は将来藩主と

なる人間として厳しく教育したようだ。知育に関しても、漢籍の素読の他、書画や和歌なども母弥姫自らが教えたと言う。事物に対する斉彬の冷静な判断力、他人への深い思いやり、公平な人材の登用、人間的な度量の広さなどは母弥姫の教育によって培われたものと言われている。
斉彬は幼い頃から大変に賢く、その英明さは幕府内でも評判となったようだ。ために幕府の老中達は「いっそのこと斉彬を譜代の小大名の藩主にして、その後に老中となし、天下の国政を掌らせたいものだ」と斉彬が島津家という外様の大大名の跡継ぎであることを惜しんだという。斉彬に仕えた蘭学者の松本弘安（後の外務卿寺島宗則）は、斉彬が同時に三つも四つものことを処理して全く誤りの無い人間であったことから、鹿児島弁で「二つ頭（びんた）の人物」と評した。

斉彬が生まれた島津家は、外様大名ではあったが、徳川将軍家、譜代や親藩の大名家、近衛家などの有力公家とも姻戚関係や血縁を成す有力な家系であった。例えば斉彬の曾祖父の島津重豪は、娘茂姫が一橋家斉に嫁ぎ、その後家斉が 11 代将軍となったがために、重豪は将軍の岳父となり、御三家に次ぐ大きな権勢を誇った。こうした姻戚や血縁関係の広さは、後に斉彬が薩摩藩主となってからの活躍を支える要因のひとつとなった。

斉彬の父の島津斉興は、斉彬が 42 歳になるまで頑なに家督を譲ろうとはしなかった。それは斉彬を大変可愛がった曾祖父の島津重豪が、洋学にのめり込み高額な異国の文物を多数収集し、教育・研究施設を相次いで設立するなど、藩の金を湯水のように使い込んで藩財政を悪化させたことから、若い斉彬を藩主にすれば、重豪同様に洋学にのめり込んで藩の財政を悪化させるに違いないとの強い懸念を抱いたからであった。
ちなみに曾祖父で 8 代目藩主の島津重豪は、32 年間もの長きにわたり藩主の座に居続けた博覧強記型の知識人で、中国語学習の著書が数冊あり、長崎出島の医官シーボルトが参府で江戸に来た際には曾孫の斉彬と共に面会し、オランダ語を交えながら歓談したという。
ところで、斉彬への家督相続を躊躇した斉興は、藩の有能な家老・調所広郷など重役達をも巻き込んで、島津家の家督を斉彬の異母実弟久光に譲らせようとしてお家騒動（お由羅騒動）まで起こした。けれども最終的には当時の老中・阿部正弘、宇和島藩主・伊達宗城、福井藩主・松平慶永らの働きかけにより、嘉永４年（1851 年）ついに隠居に追い込まれた。

嘉永４年２月２日（1851 年）、江戸城にて老中松平乗全より襲封を達せられ、正式に第 11 代薩摩守に任ぜられた斉彬は、３月９日に江戸を出発、５月８日に藩主として初めて鹿児島城に入城（初入部）し、翌年の嘉永５年８月まで１年４ヶ月ほどを領地で過ごした。この間、斉彬は初入部に伴う様々な儀式の合間を縫って、早速に鉄製砲の開発や洋式船の建造などに着手した。
ところで斉彬は薩摩藩の藩主としては前述のように 11 代目となるが、島津家当主としては 28 代目になる。藩主としての代目と当主としての代目に大きな差があるが、これは、島津家が平安時代の後期に九州南部に広がった当時日本最大の島津荘（近衛家の荘園）の地頭職や薩摩、大隅、日向など３カ国の守護職等を務めた惟宗忠久を祖としているからである。ために武家や大名としての歴史が非常に古い。ち

なみに徳川時代の全国 300 藩の中で、島津家は最も古くからの武家大名であり、その歴史の長さは徳川将軍家をも大きく凌駕する。

今は亡き作家の司馬遼太郎によると、江戸時代の世間は驚嘆を込めて「島津に暗君無し」と言ったという。それは戦国以来、島津家では歴代のどの藩主も容貌が爽快で英気を含み、更に数代ごとに天才的な人物が出たからだと指摘している。その上で、斉彬は歴代藩主の中でもひときわ英明であったと評している。

斉彬は藩主となる前の、江戸上屋敷での部屋住み世子の時代から、アジアや西欧の情勢を長崎出島のオランダ人や琉球貿易で往来する人物から熱心に入手していた。例えば清国が英国とのアヘン戦争に負け、戦後の南京条約で香港の割譲など不平等な講和条件をのまされたことや、西欧列強が強力な軍事力を背景にアジアに於いても植民地の拡大や不平等な通商条約の調印・締結を強要していることを認識し、危機感を抱いていた。

それ故に、斉彬は藩主となるや、早速に富国強兵や殖産興業を藩政の基本方針として、軍備の近代化や各種産業の振興に取り組んだ。藩の運営に関する島津斉彬の基本方針と幕府や他藩の基本方針との大きな違いは、幕府や他の有力藩がもっぱら強兵策に取り組んだのに対して、斉彬は先ずは強兵化＝軍備の近代化に取り組んだが、直ぐに富国化のための殖産興業の推進にも積極的に取り組んだという点である。

薩摩藩主としての斉彬の数々の功績等は次回に紹介したい。

****

「了解日本」(「日本を知る」)　（第２０回）　　俞彭年　（８６歳）

日本人の宗教観、神道（宗教）、天皇制

（3）　**天皇制**

6 世紀から 7 世紀にかけて、日本の倭国（現在の奈良県に位置）は周辺各地の王続を征服し、古代統一国家、”倭“を築いた。”倭“の字はのちに日本語で同じ発音の「和」に改められ、その前に「大」の字が付けられて国名が「大和国」となった。7 世紀頃から大和国大王は「天皇」の称号を使い始めた。

中国の『隋書』によると、600 年に「倭王の姓は阿毎、字は多利思北孤、号は阿輩雞彌」と記されている。

「阿毎」は日本語の「天」の注音で、「多利思比孤」は摂政聖徳太子の呼称の注音で、「阿輩雞彌」は日本語の「大王」の注音である。（注音は中国語の発音記号の一つ）

『日本書紀』（720 年成書）によると、608 年、聖徳太子は使者を隋に派遣し、国書の中に、「東天皇敬白西皇帝」と書かれてあった。天皇という言葉は中国の道教の言葉で、大和国大王が天皇の称号を採用したのは意図があり、1 つは自分が天神の子孫であることを強調、2 つは自分が国家の最高司祭であることを示して、祭祀を主宰することを通じて自分が神と一体化した王であることを表明したのである。毎年秋後に行われる「新嘗祭（天皇が収穫した新谷を天神地に献上して自ら食べる祭礼）は、神と一体となった天皇の神力を示す重要な皇宮祭祀である。

新天皇が即位後初めて行う「新嘗祭」は「大嘗祭」と呼ばれ、新天皇を神格化させる重要な祭祀儀式である。これにより天皇は政治的統治権と宗教的に国家祭祀を司る祭祀権を持つようになった。官撰史書『古事記』(712 年成書)と『日本書紀』の神話は天皇の権威と権力に根拠を提供した。

古代大和王国を建国した皇族はどこから来たのか? 『古事記』や『日本書』の神話では「天孫降臨」と言う。

天照大御神は孫の火瓊瓊杵尊(ニニギ)にこの世を統治させ、八咫鏡、草薙剣、八坂瓊曲玉の 3 種の神器を与えた。火瓊瓊瓊杵尊(ニニギ)は、九州日向の高千穂峰に神々を降臨させるよう命じられ、大和国を築き始めた。

この天孫降臨神話では明らかに大和国の支配者がその地位を神格化し強固にするために編み出したものである。

日本が第二次世界大戦に敗れて降伏する前、国家神道と御用学者は天孫降臨神話を大いに鼓吹し、天皇を「現人神(人型を現した神)」、日本を神国、国民を天照大御神の子孫と呼び、神話を軍国主義の道具とした。敗戦降伏後、日本の史学界では津田左右吉(1873 年～1961 年)歴史学者の見解が主流となり、津田研究では『古事記』や『日本書紀』の神話時代や応神天皇(第 15 代天皇)以前の時代の記述はすべて大和国支配階級を神化するための虚構であり、応神天皇以降の天皇は中国の史書に記載されているが、以前の天皇は記載されていないので信憑性がないとされている。

日本の哲学者で立命館大学教授、京都市立芸術大学学長、国際日本文化研究センター所長を歴任した梅原猛氏は 2000 年に『天皇家の「ふるさと」日向を歩く』という本を出版し、天孫降臨神話の記述に基づいて九州南部各地の神話に関する神社、遺跡、神楽、民俗、文献、民間伝説などを実地調査分析し、その中から神話と史実の接点を探し、大胆な推理を行い、神話の衣をはがし、天皇一族がどのように日本の九州地方に来て日向国を建て、その後どのように東征に行って大和国を建てたかを示した。以下は彼の推理結論である。

古代日本弥生時代(紀元前 4 世紀～紀元後 3 世紀、農耕時代)後期から古墳時代(3 世紀末～7 世紀)にかけて天皇氏族集団は朝鮮半島(又は中国大陸)から船に乗り(又は船で漂流)九州南部の野間半島に渡り、彼らは先進的な稲作農耕技術を持ち、稲作に適した土地を探していた。

野間半島エリアの土地は稲作に適さないため、探していたところ、宮崎県日向高千穂エリアにたどり着いた。そこは盆地があり、耕地面積は小さいが、水が豊富で、稲作に適しているので根付いたのである。これが天孫降臨神話に包まれた史実である。朝鮮半島から来たという推理の理由は、百済王と新羅王の祖先が天から君臨したと言ったからである。野間半島には、唐に遣わされた船が嵐の中、ここに漂着したという記録がある。

先住民族の多くは縄文時代(紀元前 10,000 年～紀元前 4 世紀、採集・狩猟・漁獲の時代)、弥生時代の前時代に属し、その生産技術や文化水準は新たに移住した天皇氏族集団に後れをとっていた (天照大神によって瓊瓊杵尊(ニニギ)に与えられたいわゆる 3 種の神器は、実は中国大陸の高度な文明の象徴であると私は信じている)。

天皇氏族集団の首領である瓊瓊杵尊(ニニギ)は、地元大山祇氏族集団大王の娘を妻に迎え、婚姻で足場を固めて支配範囲を拡大し、日向国を固めた。日本の民族は弥生時代と縄文時代を結合したものだと明らかである。日向国の 3 代大王

はいずれも地元の先住民である吾田（阿多）隼人氏族グループと結婚し、吾田隼人氏族グループは漁業や貿易に従事し、優れた航海技術と勇猛さを持っていた。

建国神話によると、神武天皇は九州の日向から本州の大和まで海を渡って東へ向かい、ついに大和王国を建国した。実は神武天皇は日向王国の4代目であり、狭い地域ではこれ以上の拡大は難しいと感じ、海への進出を計画した。

神武天皇は、吾田隼人族の王の娘を妻にし、吾田隼人氏族集団と大隅隼人氏族（山里居住の隼人氏族）集団の強い支持を得て東征を実行、勝利をして大和国を建立した。隼人氏族は勇猛で、船もあれば航海技術もあり、さらに富もあったので海を越えた東征の勝利を保証していた。

神武に流れる天孫族の血液は 8 分の 1 にすぎず、彼の曽祖母は土着の大山祇氏族大王の娘で、祖母も母も隼人氏族大王の娘であるため、土着人の血液は 8 分の 7 を占めていた。神武が天孫と呼ぶには、神話に頼るしかなかったのだ。

また考古学者で東洋史学者の江上波夫教授が 1948年に発表した有名な天皇一族は東北アジア遊牧系騎馬民族であるという説もあるが、その説は概略的には以下の通りである。

日本国の始まりは倭国であり、その倭人は中国江南地区の土着人であり、紀元前 4 世紀から前 1 世紀にかけて日本の九州地区に来て、彼らは先進的な弥生時代の水稲栽培文化で、遅れていた縄文時代の採集狩猟文化を変え、北九州地方を統一して伊都国を建設した。

その後邪馬台国が出現し、その女王卑弥呼は神権政治を行った。邪馬台国は後に大和地方に移転し、畿内を中心とした広大な地域を統治した。これが大和朝廷の創建であり、その創始者は崇神天皇で（皇室系図によれば 10 代目であり、最初に実在した天皇である可能性がある）、時期は西暦 5 世紀頃であった。

日本の古墳時代（弥生時代以降、西暦 3 世紀から 7 世紀ごろ）中期に突然、馬具などの騎馬民族の文化が出現したことは、4 世紀末から5 世紀前半にかけて騎馬民族の王朝が来日し、彼らが天皇一族であったことを物語っている。

この騎馬民族はアルタイ語系の満州系のツングス語族で、言語的には東北アジアの扶余族の辰王族で、彼らは先に朝鮮に入り、任那と伽羅に倭国を建興し、その後日本九州の筑紫地区に倭国を建興したが、筑紫の倭国は、当時は秦王族の倭国と呼ばれていた。

秦王族の倭国は大和地方に進み、日本全体を統一して倭国王となり、日本天皇に推戴された。遊牧騎馬民族の扶余族は武力で日本を征服したのではなく、宗教と文化の力と政治的手段に頼って、巧みに現地の農耕民衆を自分に従わせて、そして彼らに自分を神権統治者天皇に推戴させた。

2001 年の天皇誕生日に皇室の血統について語った明仁天皇は、『続日本紀』に記されている桓武天皇の生母が百済武寧王の子孫であることについて、韓国との因縁を感じたと述べた。実は歴史上の百済国も遊牧騎馬民族扶余族系が建てた国であり、日本の天皇家と関係がある。これにより「日本単一民族説」と「天皇万世一系説」は、自ずからなくなった。

天皇が存命中に裕仁天皇と呼ばれ、現在の天皇の名前は明仁であるから、明仁天皇と呼ばれる。天皇が亡くなった後、明治天皇、大正天皇、昭和天皇のようにその諡号を呼んだ。現在の天皇は皇室系図では第 125 代（神話上の天皇を含む）である。天皇は最高統治者で権威があるが、常に権力、実権があったわけではない。

奈良時代（710 年～784 年）から平安時代（794 年～1183 年）末期の間は平家一族が実権を掌握、朝廷の実権はその前までだった。

1192 年に鎌倉幕府が樹立されてから、1867 年に最後の将軍徳川慶喜が「大政奉還」し、江戸幕府が滅亡するまで、この 675 年の武家幕府時代、天皇の名は聖尊であり、実際に実権はなく、幕府政権の引き立て役だった。

1867 年の明治維新前後、反幕府派と新しい権力者が、天皇を利用して尊王思想を打ち出し、自分たちで「王政復古」の政策を遂行、衰退した天皇を政治の舞台に引き戻した。

明治維新後、新たな支配階層は、封建資産階級と、立憲君主制という近代天皇制とを確立し、国内的には資本主義を発展させ、対外的には侵略、拡張路線を 1945 年の第二次世界大戦敗戦の無条件降伏まで続けた。

その間に明治天皇（名睦仁）、大正天皇（名嘉仁）、昭和天皇（名裕仁）の 3 天皇がいたが、彼らの歴史的役割はどう評価されたのだろうか。

敗戦後の 1946 年 11 月 3 日に公布された新憲法は、明治憲法で定められた国家体制を廃し、主権が天皇にあることを否定し、主権が国民にあることを明確にし、天皇を日本国の象徴と定め、日本国民全体の象徴であり、国家儀式のみを行い、政治的および軍事的権力を持たず、非武装の平和主義と基本的人権の詳細を規定しています。天皇主権の天皇制から象徴天皇制へと変わった。

天皇制が何故、現在まで続いているのだろうか。著名な作家、松本清張はかつて、皇室を凌駕する多くの有力者、特に武力を持った武家集団には、平清盛、源頼朝、北条氏、足利氏、そして徳川氏などがあった。彼らが天皇になりたいと思えばすぐに天皇になれたはずなのに、――――なぜ権力者は天皇にならなかったか？誰もがその理由を知りたいと思っているが、歴史家は詳しい説明をしておらず、学術的に証明するのは難しいと言われている。日本人の素朴な神道（宗教）意識と関係があるのではないかと自分は考えている。

****

「明治時代、新生日本を新しい乗り物、自動車が後押し」 のつづき

津田孚人（８６歳）

（車を愛用した明治の有名人）

前回、１９０８年（明治４１年）８月２日の時事新報の記事に、有栖川宮を中心とした自動車を愛好する富裕層の人たちが日比谷公園霞門から甲州街道を走って立川まで行き饗宴を楽しんだとあった、という話をのせました。当時の国内の自動車保有台数はわずか数十台、ドライブして楽しむのに使われたと同時に、自働車を利用して後世に名を残す大仕事が出来た、あるいは自動車があったからこそ出来たとも言えそうです。自動車の導入が遅れていたら、歴史はだいぶ変わったかもしれません。

大隈重信は、爆弾を投げつけられ右脚切断をしましたが、出かけるのに自動車を使うようになりました。渋沢栄一は、飛鳥山に別邸を構えると、兜町、深川などの事務所へ出かけるときには、それまでの馬車を自動車へ切り替えています。第一生命創業者の矢野恒太は、顧客を訪ねて飛び回り、秘書役の石坂泰三を困らせていますが、もっぱら自動車を使ったと思われます。

以下、そのあたりの様子を辿ってみました。また、矢野恒太の項で、矢野社長を補佐する秘書役・石坂泰三の＜動き回るトップへの愚痴＞が、本人の書に出ているの

で、付け加え中ました。

大隈重信

大隈は、第一次伊藤博文内閣で１８８８年（明治２１年）２月に井上馨に代わって外務大臣となり、同年４月に、黒田清隆内閣になっても外務大臣に留任した。しかし、１８８９年１０月、外国人判事導入問題で玄洋社の来島恒喜に爆弾を投げられて負傷、右脚切断を余儀なくされた。以後、片脚での乗馬は苦しく、それ故に、自動車愛好者になった。

大隈は、これからの時代は「爆発瓦斯の時代」、すなわちガソリン、石油の時代だという感覚を強く持ち、馬車よりも自動車を好んだ。好んだ車はフランスのホチキス社製の車、最初の購入は明治３０年（１８９７年）のころ、ついで明治３９年（１９０６年）１２月８日の読売新聞朝刊に「大隈伯は今回７千５百円の自動車を買い入れた」とあり、２台目を９年後に購入したようだ。

大隈は、林平太郎という専用の運転手を雇っている。林は、土佐女子高等師範学校の教師だったが、欧州の貿易商から運転を習い、自動車修理にも習熟していたので、見込まれて大隈の自動車運転手になった。自動車時代の初期、運転手は貴重で厚遇された。林は、車を車庫にしまうと別室に呼ばれ、二の膳付きでお銚子が出て、お変わり自由で飲み放題だったとのこと。

渋沢栄一

立ち上げた会社の数は１７８社、次々と会社を設立、そのために寸暇を惜しんで活動せねばならなかった。多忙な一日のスケジュールをこなすのに便利な手段として自動車を使ったようだ。渋沢は、大蔵省の役人時代から馬車を愛用していたという。渋沢が大蔵省の役人だったのは、１８６９年２月から１８７３年５月まで。また、当時もっとも一般的だった人力車も愛用している。

渋沢は、第一銀行に通うのに便利な兜町、深川、湯島に住んでいたが、飛鳥山に別邸を立て「民間」外交の拠点とした。深川から、飛鳥山に移転するために、１８７７年に約４千坪の土地を求め、清水組に敷地造成させたうえで母屋と付属家屋を新築し、１８７９年（明治１２年）に飛鳥山邸を完成させた。飛鳥山邸は、当初は別荘・接待接客の場として活用し、国内外の賓客を招きながらさらに土地を増し、付属家屋などが建設され邸宅となった。

飛鳥山の自宅が完成した後は、兜町の私邸は第一銀行や東京商業会議所など活動拠点に近かったので渋沢事務所として活用された。飛鳥山からの移動は、馬車から自動車へと変わった。１９０１年に兜町を離れた渋沢は、没するまでの３０年以上、飛鳥山邸を本邸とした。

自動車を利用し始めたのは明治４１年（１９０７年）頃から。車体は、ウーズレーからデムラー、ハドソン、ウェズラー、リンカーンになった。欧米の輸入車をいろいろと買い変えて使っているが、当時は車が普及していないので道路状況が悪く事故が多かったこともある。

渋沢は、明治４１年（１９０８年）１０月、大磯に伊藤博文を訪問した帰りに、交通事故で負傷している。また明治４５年（１９１２年）７月２日には、愛車を駆って移動していたところ駿河台下において乗用車事故で顔面に軽傷を負った。

いわく「夜９時半頃飛鳥山男爵高田商会招宴より御帰途、小川町東明館付近にて、殊に雨中なり、自動車転覆、為に御怪我、右の眼の上方瘤出来御手当成候、

午後２時御帰館相成候」。
　当時は車の何たるかがわからず、危険を感じてクモの巣を散らすように逃げ惑って、かえって車にひかれるケースも多々見られたという。事故は多発したが、自動車の便利さは遠距離に出かける場合には決定的だった

矢野恒太

　矢野恒太（第一生命社長）は、高額契約主義をとり、富裕層を対象として保険販売を行った。販売は代理店を置かず直販方式としたので、本人自ら飛び回っていた。富裕層への営業は、出資者、知人などの紹介に頼った。立川行きのドライブも営業活動の一環であったのかもしれない。
　矢野恒太については、石坂泰三（第一生命社長、東芝社長、経団連会長を歴任）が自著「勇気あることば」で、次のように書いている。

　第一生命は、最初秘書役ということで入社（大正４年年９月）したのだが、不向きだったのだろうか、あまり秘書的なことはやらされなかった。こんな失敗談があった。
　矢野さんのお伴で福島に出張したとき駅前に矢野さん用のピカピカに光った人力車が迎えに出ていた。わたしはうかつにも、いきなりピカピカの方に乗ってしまった。お迎えの人たちは周章狼狽していたが、当の矢野さんは「いいよ、行きなさい」と言われてお伴用の車に乗られたそうだ。
　世間知らずのわたしは、自分の失礼千万なミスを忘れていたが、後日、当時の福島支部長にその日の事情を聞いたときは顔の赤くなる思いだった。
矢野さんという人はまったく立派な人だったと今も身にしみている。
　矢野さんは、いつでも仕事の大綱だけを把握し、こまかいことには一切口を出さなかった。また、その反面、金銭欲のない人でもあった。はやい話が、自分の財産についても、全然関心がなかったようだ。会社の外で活躍しているので、矢野さんは大事な実印まで、わたしに預け放しであった。
　そのため月給や他の収入の金はなんでも私が受け取って森村銀行へ預けていた。だから、金が必要なときは、わたしに「出してきてくれんか」とひとこというだけで、銀行に預金がのこっていようがいまいが、お構いなしのわれ関せずといった調子だった。だから矢野さんも、「まだあるか」などとヤボをいわず、わたしも「もう預金はありません」と口に出したこともなかった。
　こんなわけで、金のない場合はわたしが立て替えて、あとで月給や賞与で埋めていく始末だった。わたしが預かっていた実印は、第一生命を辞めるちょっと前に、矢野さんの息子の一郎さん（第一生命社長・会長）が来るまで預かっていた。それにしても実業界では型破りの人物だったと思う。

注　大隈重信　１８３８年（天保９年）～１９２２年（大正１１年）、
　　渋沢栄一　１８４０年（天保１１年）～１９３１年（昭和６年）、
　　矢野恒太　１８６５年（慶応元年）～１９５１年（昭和２６年）、

参考　「日本で自動車はどう乗られたのか」（早稲田大学、小林英夫名誉教授論文）
「大隈重信（上）」伊藤之雄著・中公新書
「渋沢栄一」木村昌人著・ちくま新書
「勇気あることば」石坂泰三著・読売新聞社
「第一生命７０年史」

後記

佐川雄一君の急死にショックを受けています。天地シニアネットワークを一緒に立ち上げた小作、小俣が去ったあと、一番の頼りでした。寄稿者が減って寂しくなってきたところで、精神的な強い支えになってくれました。

病院の定期検査（二カ月ごと）で全く異常が無い状態が続いており、会う方からも元気ですねーと言われますが、少し気になるところがあるので、負荷心筋シンチグラフィという検査を受ける予定です。

年齢的には厳しくなってきましたが、出来るだけ気弱にならずに前向きにと思っておりますので、引き続き、ご声援のほどよろしくお願いします。

津田

****

事　務　局

****

天地シニアネットワーク事務局　（津田　孚人）
住所：〒１１６－０００１荒川区町屋３－２－１
ライオンズプラザ町屋７０３
メールアドレス：tentisenior06@gmail.com
電話・FAX：０３－３８１９－７６５１